

細野
壺井 榮菊

幸田 文集

39

現代文学大系



網野 壺井 幸田
菊 榮 文
集

現代文学大系 39



筑摩書房

現代文学大系 39

網野菊
壺井榮 幸田文集

昭和四十三年一月十日第一刷発行

著 者

網野菊
壺井榮 幸田文

発行者

竹之内静雄

発行所

株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装 幀 真鍋博

本文用紙 三菱製紙株式会社
表紙クロス 東洋クロス株式会社
本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 和田製本工業株式会社

網野 菊集 目次

妻たち

憑きもの

金の棺

業

さくらの花

壺井 榮集 目次

二十四の瞳

屋根裏の記録

日めくり

五

空

七

六

二三

一四

二五

二九

幸田 文集 目次

流れる

三〇一

勲章

三〇五

黒い裾

三〇二

年譜

三〇六

人と文学

小松伸六
三〇七

口絵写真撮影（網野菊） 吉川 需

”

（壺井榮） 早田美利

”

（幸田文） 三木 淳

網
野
菊
集

業

網野菊

妻たち

一

「村田さん、いらっしゃいますか?」

アパートは四軒一棟になっていて、ウメ達は階上の一軒に住んでいるのであったが、コンクリートの階段の下の入口の所で、ウメの旧姓を呼ぶ女の声がした。聞き慣れない声なので誰かと思ってウメはドアをあけて、廊下へ出て階段を覗いてみた。コートの上に肩かけをかけた小柄な中年の女が立っていて、ウメの顔を仰ぎ、笑顔になった。

「私、染井ですの」

染井といえ、たしか女学校で一年以上級にいた人に違いないのだが、とウメは思ったが、二十年という月日のために、その女の顔はハッキリ其の人だという気をウメにさせないのであった。それでも、ウメは、

「さあ、どうぞ」と愛想よく云った。

「よろしいんですの? お邪魔じゃありません? 私、今そのあなたのおさとの近くまで来たので、あなた、どうしておいでかと思つて、一寸お寄りして、伺つたら、こち

らにお住いだとのこと……」染井は中々あがつて来ずに階段口でそんな云いわけを云っている。

「まあ、どうぞ、おあがり下さい」重ねてウメが階上から勧めると、彼女は、

「そうですか、では……」と云つて、あがつて来た。

ウメは彼女を、二た聞きりの住居の、広い方の座敷へ案内し乍ら、「この人は矢張りあの染井さんであろうか?」

それとも別な人なのではあるまいか?」と考えていた。それ程彼女はウメの記憶にある、昔の女学校時代の染井キヨ子と違つて見えた。だが、坐つて向き合つて話しているうち、染井キヨ子に相違ない事がウメに確められた。

女学校時代の染井キヨ子は文学少女で、当時若い文学好きの女達に人氣のあつた雑誌に投書して、その文芸欄では相当名前が通つていた。ウメと交渉のあつたのも、つまりはお互いが作文を得意にしていたからだつた。ウメは小学校時代から綴方だけは点がよくて、女学校になってからは殊に他の級の者達からも名前を覚えられていた。染井キヨ子はウメに交際したいと手紙で申込んだ。それで、或る日、放課後の二階のガランとした一教室で二人は対面した。何も話す事がなくて、ウメは手持無沙汰な気持ちで窓の外を雨を見ていた。それから以後、女学生らしい、甘ったるい感傷的な手紙を幾度かやりとりした。染井キヨ子は、ウメよりも上級だったから先きに卒業したが、ウメはじき、キヨ子が雑誌での投書家仲間の男と結婚したという噂を聞

いた。そして、それきり彼女の消息を聞かなくなった。今が、それから廿二年來の対面なのだ。

ウメは隣の四畳半の室に夫の木原政平が読書をしている、その妨げになりはせぬかと氣をつかいつかい、キヨ子に応待していた。政平は、読書中に隣の室で話し声がするのを大変嫌うからだ。仕事を探していたウメが友人の紹介でようよう、春休みの間だけ英語をならいたいという一人の女學生を得た時にも、政平は隣の室で教えられては困るというので、ウメは近所のウメの実家の座敷を借りて、そこで教えた位だ。ウメは政平にとっても興味のありそうな女客の場合には、政平にもウメの客の所へ出て貰う事にしていた。ウメは、今の染井キヨ子に政平が興味をもちそうには思わなかったが、それでも一応、夫のいる室へ行き、「出てらっしゃる？」と訊くと、彼はかぶりを振った。

ウメは、ひねこびて味もなくなった季節おくれの蜜柑を出して、キヨ子にすずめた。キヨ子は、隣室のウメの夫に氣がねというよりも寧ろ好奇心をもつような様子だったが、ウメの勧める蜜柑を手にとって、女学校時代の作文の先生や校長の話、それから、自身の身上話など小声でするのであった。彼女は廿年連れそった夫に昨年死別して、現在は中学校を出て或る会社勤めしている一人息子と、ここから余り遠くない町の下宿屋に下宿しているのであった。夫は可なり手広く商いをしていたが、四年病つたあげく、転地先きで死んだ。ウメは、商いをしていたというキヨ子の言

葉に、「それで、この人は話をする時あたたまをチョッチョッとさげる癖がついたのだな」と心に考えたりした。なにかにつけては、「左様で左様で」と痛み入ったように首をチョッチョッとまげて合づちをうつ彼女を見て、昔の、あの雨降りの日のガランとした女学校の二階の教室で会った彼女とはなんとという変りようかとウメは思った。同時に、ウメは、先頃或る女流作家にあった時の事を思い出した。ウメは其の女流作家とは親しい間ではなく、用事で其の家を訪ねる事になったのであった。ウメが幾度もお辞儀をするのに対して、その初対面の女流作家は、「私のうちでは、左うお辞儀をしない事にしていますの」と云った。そう云われるとウメは、そんなにお辞儀ばかりする自分が恥ずかしくなった。ウメが木原家の家風になじまないと木原の身内達は思い、ウメ自身も思っているのにも拘らず、いつの間にか、木原の故郷の身内達の風習が自分の身に染みついている事に氣がついて驚きもした。木原の身内の年いった女達は、肉親の姉妹同士の間でも、挨拶の一句毎に平伏してお辞儀を仕合うのだった。ウメは、キヨ子の癖から、それらの事を思い出し、境遇の影響というものについて考えずにいらなかった。

「あなたが満洲へいらっしたという事を噂に聞いて居りましたので、今も満洲かと思ひまして、満洲のどちらか、おさとど伺おうと思つてお寄りしましたら、もう満洲からお帰りで、此のアパートに住んでらっしゃるって伺ったもの

ですから……」キヨ子はそう云って、そして、満洲についていろいろ訊く。

ウメはウメで、政平の就職口も彼女自身の勤め口も東京ではみつからず、政平は故郷の家へ帰る帰ると云うし、ウメは夫の故郷の家へは行きたくないし、で、毎日毎日落着かぬ、不安にみちた日を送っているの、夫に死別したとはいえ、家作も一二軒は持っていて息子と水入らずで暮しているキヨ子の方がのんきなように思えて、キヨ子の、満洲へ行こうかどうかと迷っている心の底までは推しはかろうとしなかった。

「東京の方がいいとお思いですか？」とキヨ子が云うと、ウメは、

「東京は私の故郷ですから……」と答えた。ウメは、其のウメの故郷の東京に住む、住まないで、いつも政平と口争いしている日々の生活はキヨ子には話しも出来ず、キヨ子との対話を隣室の政平はどう聞いているだろうかと、その方と思うのだった。

キヨ子は、しなびた蜜柑をすすめられる儘に食べたりにしていたが、正午のボーが鳴ると立上った。キヨ子は隣室のウメの夫に好奇心を残すような顔つきで帰って行った。

ウメは、其の後、道で、続けてキヨ子に出会った。一度はお辞儀だけで別れた。次ぎにはウメが市場から買物して出て来た所だった。キヨ子は他に同年配の女の連れがあり、その連れを待たしての立話だった。

「矢張りまだ、あの下宿にいらっしゃるんですか？」

「ええ。主人が死んでから、なんだか、ぼうつとした気持なんですよ。いまだに何も手につかない気持ですわ」

「でも、息子さんがいらっしゃるから、いいじゃありませんか」

「それでも、やっぱり……」

「だって、全然ひとりの人だっているんですもの。それに比べれば、あなたなんか、お子さんがあるだけ、ましじゃありませんか」ウメは、自分が夫と別れたら全然のひとりになるのだ、と心の中で感傷的に考え乍ら云うと、キヨ子は、

「そうですね。それはそうですね。全然ひとりの人よりはましですわね、全然ひとりの人もあるのですものね」そう素直にウメの言葉を認めて、ニコリ笑った。そして、「けれど、主人がなくなつて、もう、かれこれ一年たちますのに、今だに、なんですか、何も手につきませんのよ。でも、それも仕方ないかもしれないわね、何しろ二十年も一緒にいたんですから。そんなに直ぐ忘れちゃ、仏様にすまないかもしれないわね」と云って、案外快活に笑った。それは、「仏様」という古くさい彼女の言葉とはうらはらに、大変若々しい感じのする笑い方だった。瞬間、ウメ自身キヨ子の其の若々しい笑い方にホッと心を明るくされた。ウメも一緒に快活に笑った。

「そりゃ、そうですね、そんなに直ぐ忘れてはね……」

二人は笑って別れたが、ウメはキヨ子の笑顔に救われたような気持ちを味わい乍らも尚、キヨ子の言葉を哀しく思い返した。ウメには、自分自身をもふくめての、女性全体というものが哀れに、いとおしく考えられるのだった。

二

ウメは用事で銀座へ行った。用事という、心に対しての云いわけがなければ、そう軽々と銀座などへは出かけられないような、この頃のウメの生活であった。用事をすませて、さてバスに乗ろうか電車に乗ろうかと考え乍ら四丁目の方へ歩いていこうと、ウメは白井幸子に出会った。

「まあ、どうなさって、その後？」

ウメは十月ばかり前、幸子から、病氣保養のため満洲から帰省して横浜の実家で暮しているというハガキを貰っていた。幸子のことはいつもウメの心にかかっていた。満洲の夫の許で暮すべきか、それとも思い切って別居して東京で劇作の仕事が続けようかと迷っている幸子の問題は、夫について夫の故郷の家で暮すべきか、それとも東京に一人残って書く仕事に専心しようかと心迷いしているウメ自身の問題にも通じているからである。

「相変らずなのよ。ま、お茶でも飲まない？」と幸子はウメを誘った。

「そうね」ウメは、景氣よく幸子の誘いに応じたが、その癖、心の中では、急いで懐のお金を胸算用してみねばなら

なかった。幸子が誘ったからと云っても、ウメは、兎も角も二人分の紅茶代、それから今夜の自分達夫婦の、多分幸子の分もこめての食事代の用意がなければ不安だった。

二人は喫茶店に入った。ウメにとっては初めての家だった。昼間のことで普段着姿の芸者達が紅茶をのんだりアイスクリームを食べたりしているのがウメの眼には珍しいものに映った。

「御健康はいかが？」

「もう殆どいいの」

「では、近々に満洲へお帰りになる？」

「それがね……」幸子は袂から煙草を出して火をつけた。

幸子とウメは満洲で三四月程、同番地に住んだ。ウメは満洲へ行く前に多少文壇で名を知られていた。政平はウメの作品の一つを読んで、それについてウメに手紙を送った事があった。政平は父母きょうだい大勢の家庭から離れて満洲に就職すると間もなく、淋しさを感じて結婚を思い立ったが、さし当ってこれと云う女性も思い当らなかったのだ、まだ一度もあった事のないウメに結婚を申込んだ。ウメは政平よりも四つ年上だった。ウメは政平の申込みの唐突さに驚いたが、彼の手紙はいかにも真面目だったので、結婚を承諾した。家庭的にも思想的にも仕事の上にもウメは当時行きづまりを感じていたし、年も三十になっていたもので、そんな突飛な結婚をする気になったのであった。ウメが満洲へ行ってから七年の間、政平は内地へ帰りたい帰

りたいと云い暮した。子供も生れず、単調な生活が政平には苦しいのであった。ルンペンになつてでも内地の生活がしたいと云い、終いには政平は、こうして此の儘いたら病氣をするか、放蕩をするか、どちらかだと云い出した。そして又、政平は結婚当初は、「お前の芸術をのばしてやりたいので結婚したのだ」と云つていたが、やがて、「子供が欲しかったから結婚したのだ」というようになり、だんだん文壇から忘れかけられてゐるウメに、「お前が文学を勉強しないのなら（という意味は、この場合には、『発表しないならば』という意味になった。ウメは文をかく事はいていたからである）お前としての魅力がない」と云うかと思うと、「全然家庭的な、女中仕事だけに甘んじるような女と結婚したかった」と云つたりした。ウメ自身にとつても、原稿紙などと思うように手に入らぬ満洲での生活はわびしく、単調さを苦しく思うことはあつても、夫の両親達と別居してゐられるので、気がらくだった。ウメは、夫の弟妹達が中学校を出る迄は、と政平をなだめなだめしていたが、その弟も学校を出て政平と同じ土地に就職し、大きい弟は金持へ養子に行つたし、父親はなくなつて家庭の負担が少くなると、政平の内地へ歸りたがる気持は一層つのもり、ウメも、政平の気持は無理がないと思うのであつた。ウメは、自分が政平の故郷の古いしきたりの家で、政平の母やきょうだい達と、一緒にうまく暮して行けるかどうかと思ひ、その事は始終苦の種になつていた。併し、満洲

にとどまれば政平は病氣をするか放蕩をするかだといふ……。どつちにしてもウメにとってはいい事はないのである。それならばいっそ政平の望みもかなえて、そして自分は自分で今のうち内地へ歸れば、万一の場合、さきへ行つてもっと年とつてからよりもまだしも自活の可能性があろう、とウメは考え、結局、政平の辞職に同意した。政平の母や弟達は、「寝耳に水の報せ」と驚いて、辞職を思いとまれと、電報をうつて来たりした。又、政平の母は、「いかなる悪魔がみ入りしか」云々の手紙をよこし、「降る雪を眺めては涙にかきくれ居り候」と云つて来た。人しれず涙にかきくれる気持は、ウメにとつても同じなのであつた。政平の在職中の積立金、身許保証金、退職手当等を全部よせると、政平の妹が女学校を卒業する迄のあと二年間、これまで通りの金額で故郷の家をまかない、政平夫婦の新しい就職までのほぼ二年間のつましい生活費が保証されるのであつた。政平は、東京の大学に入り直して勉強し乍ら二人の職をみつつけようというので、ウメは、政平の故郷の家で生活せずにすむ事を喜んだ。

幸子は、ウメ達が引上げる二三ヶ月前に渡満してウメ達と同番地に住むようになったのであつた。幸子の夫は幸子よりも二年程前に満洲へ移つてゐた。幸子もウメと同じように子供がなかったし、劇の仕事の方では仲間同士の評判がよかつたので、その仕事を続けたさに東京に残つて或る婦人団体の芸術部の仕事など傍ら手伝つて、その方の収入

からと夫からの仕送りとで生活していたのであったが、実家の父母が幸子夫婦の別居を案じるし、夫も、来て欲しいと云うので、夫の許へ来たのだった。だが、何としてもやりかけた劇の仕事には未練があったし、夫の放蕩のこともあり、いきなり冬の満洲へ来たことと健康もすぐれず、幸子は、いろいろと心迷いする事が多いのだった。幸子は、仕事の性質は違っても、同じ芸術というものにたずさわっているウメが同番地に住んでいる事を知ると、ウメを訪ねたのだ。その頃は、もう、ウメ達は、引上げを決意していた。ウメは幸子の心の迷いに対して決定的な忠告を与えることが出来なかった。第一には健康の問題。これは医者が内地へ帰った方がい、^いといえは、それまでである。第二に、ウメは同番地に住み乍ら幸子の夫には会った事がなく、幸子の家庭生活について、ハッキリした意見を持ち得ない。第三に、ウメは幸子の劇作をよんだ事がなく、演出振りを見た事もないので、その方の幸子の天分がどんなものであるか、分らない。文学の仕事は、どこにいるから出来る、出来ない、というものではないに違いないが、それで収入を得るとか、文壇に出るとかいうことになる問題は違ってくる。又、家庭のことに文学の仕事とが両立出来ないともみすみす分っている場合、家庭をとるか、文学の仕事をとるか、という事は、結局は、当人の熱意如何であつて、はたから何とも云う事は出来ない、とウメは考えるのであった。ウメ自身は、今、文学というものの、或いは文壇という

ものに対して、劇の仕事に対しての幸子程の熱意をもっていない。もしも家庭にじっとして暮らして、そして姑や小姑達の重圧さえ感ぜずいられたら、この上ない、とウメは消極的に考えるのであった。ウメは幸子の煩悶に対してハッキリした助言が出来ず、只、知り合いの婦人から最近聞いた事を幸子の参考までに話した。これも幸子やウメと同じように文学に志していた女性についての話だった。その女性も、創作志望だった。男女共学の或る大学に在学中、同級生と恋愛結婚をして数年暮らしていたが、矢張り子供がなかった。男は満洲に職を得て渡満したが、女は仕事と東京への愛着がすてにくく、亦、自身、記者という職業をもつてもいたので、夫にはついて行かず、東京に残っていた。別に彼女を愛している男もあつて、彼女は男にも多少心をひかれていたという噂もあるのだったが、これは多分噂にすぎまい、とウメは思った。そういうような時にはそういう噂が立ちやすいものなのだから……。そうこうしているうち、矢張り、二年たった。夫はしきりに「来てくれ」と云ったが、女は中々渡満しなかった。遂に夫から、「では、自分はこちらで別の女と結婚するから」と云つて来たので、女はびっくりして東京での仕事をやめ、満洲へ渡った。所が、夫は妻の到着する十日前にカフューの女給だった女と既に結婚して了つたので、女は、その夜泊る宿にも早速困った。女は、東京でその人の妹と一寸知り合いだったというだけの縁を便りに、或る会社の上の

方の人を訪ねて、幸い、その人の世話で其の会社に一時的な職を得、宿もその人の家庭で世話してくれたので、路頭に迷わずにすんだ。そして此の土地に暫く暮すうちに、別の或る人の世話で、彼女自身、新しい結婚生活に入ったという話なのである。

此の女の話は、ウメ自身にとって、ひとごとでない感じがし、幸子にとっても一つの参考になるようにウメには思われた。ウメには、その女の話も幸子の身の上も、自分自身のもののように考えさせられるのであった。そしてこういう迷い方をしている女は、今、他にも大勢いるのではあるまいか、とウメは思った。ウメは、もしも自分が幸子の立場であつたら、(幸子の夫は「三男」であるから「長男」である政平のように「家」やきょうだい達についての負担がない)劇の方は思い切つて、夫の許にとどまるだろうに、と思うのであったが、一方また、ウメは、自分がそんな風に考えるのは、はたの女がウメを見て、「私があの人であつたら、姑や小姑が一緒だつて、夫の許にとどまるだろう」と考えるようなものかもしれぬ、とも思った。

ウメは、迷ひ続けている幸子を残して満洲を去った。日本に帰つてからのウメ達の生活は二ヶ年間の生計の準備はあつたとはいへ、政平は、親きょうだいを養う責任があつたから呑気にしてはいられなかった。「職業にも何にもしばられない自由さを味わつてみたい」大学を出て直ぐ就職した政平は以来八九年の間そう思い続けていたのだが、職

をやめても、何にもしばられぬ自由さを味わうという余裕のある気持には長く浸り得なかった。じき、生計の不安、中心点のない生活の落着かなさに焦り出した。最初の政平の予定では政平は東京の大学に入り直す、そうして其のうちには政平にもウメにも収入の道が開けるであらうという事だったので、ウメは、政平の故郷の家でなしに東京に住める上、自分の仕事にも希望がもてる事を喜んでいたのであるが、政平は、先輩の一人から、そんな事をすると政平のもとの大学の教授で、これまで政平の就職の世話などをしてくれていた松本博士が今後政平の職の世話をしてくれなくなるだろうと云われて、東京の大学入学を断念して了つた。

日頃彼は松本博士には心服し切れないとウメに云い、松本博士には今後就職の世話にはならぬつもりだと云い云いしていたので、政平が先輩の言をいれて大学入学を断念した事はウメにとっては意外だったが、ウメは、それも結局は政平が故郷を愛していて、故郷に生活する親きょうだいや先輩友人達に心をひかれるためであらうと解して、政平には何も云わなかった。併し、ウメは政平の故郷の家にいたら精神的に窒息するばかりであつた。二年前に死んだ政平の父は、政平が帰省の度満洲の職をやめて帰国したいというのを、ウメの指しがねと思ひ、又、家になじまず、黙然としているウメを眼のかたきにして、「家族制度を破壊しようとする奴には、俺は全家族をあげて戦つてやる」と

云ったりしていたが、その父が死ぬとそれまで割にウメに對して優しかった政平の母が急に強氣になってウメに當るようになったし、政平の弟の一人は何かと政平に指図して父代りになった。満洲で政平の末弟と狭いアパートの室に同居してその弟一人だけからでも何かと圧迫を感じていたウメは、政平の故郷の家で、彼の母やきょうだい達の中で上手に暮して行く自信がもてなかった。それに政平は、「人の氣持というものは変化するものだから、さきざき俺の心もどういふ風に変るかもしれぬ」と云い云いするので、子供もたぬ、そして政平よりも年上のウメは、將來に對しても不安でならなかった。万一政平と別れた場合の自分の生活も考えておかねばならぬと思うのだった。それにはどうしても矢張り東京にいて、自分の昔の書く仕事を続けて行きたかった。二人の結婚の頼まれ仲人になつてくれた上山氏夫妻も、政平の家でウメが息をひそめたような生活をしているのを見ると氣をもんで、殊に進取的な氣性の上山夫人はウメのことをはがゆがって、上京をすすめた。齒切れのわるいウメも、結局は政平の家に居るのが苦しくなつて上京した。ウメが東京の実家に來てから二た月程すると、政平も、兎も角も東京で生活してみると云つて上京し、二人は家を借りたが、政平の心は落つかず、一年たつ間に二三度故郷へ歸つては、一と月位ずつ母の許に滞在した。そして東京の家はその間に三度も転宅した。政平の母は、政平が上京するのはウメが誘惑するからであつて、そしてウ

メは政平を利用してゐるのだ、と云つた。そういう母の意見で政平はまた一々正直にウメに伝えるので、ウメはいい氣がせず、ますます政平の故郷へ行くのがいやになった。

政平は政平で、夫について夫の故郷へ素直に歸ろうとしないうメに對して腹を立てた。最近も政平は故郷へ歸つたが、母やきょうだい、先輩達の意見をきくと、ウメがこの上ない惡妻に思われて、今度こそは断然離別して自分はどう上京しまいと思つた。そこへ、工業用のドイツ語の小冊子を訳してくれぬかという話をもちこまれた。政平はそれを断るつもりでいたが、政平の母もすすめるし、ウメもかねがねそういう内職を探していたからと思つて、それを引きうけ、その仕事をもつて上京した。併し、ウメはドイツ語は初歩しか出来ない上に、それはウメに縁遠い工業上のものであつたから、ウメ一人で出来る筈はなかつた。結局は政平が大部分をやつて、ウメはホンの手伝い程度であつたが、ウメは、政平がその内職仕事をもつて上京してくれたという事を大変嬉しく思つた。政平もウメに会つてみると、ウメの云い分も尤もという氣がして來て、そして自分ももう少し東京にいてみようという考へになるのであつた。それで、今、ウメ達の家では、小康——というのは、政平が東京にとどまるという事に心をきめたという意味——を得てゐるのだった。

そんな風だったので、ウメは、十月程前、病氣保養のため日本に歸つて今実家に暮してゐるという幸子のハガキを

受取って以来、幸子の事が、ひとことならず気になっていたのであった。

ウメと幸子は紅茶をのんで喫茶店を出たが、勘定は幸子が払った。ウメは、政平も幸子に会う事はきっと喜ぶだろうと思ったので、幸子を自宅へ誘った。

政平はウメの予想通り幸子を見て喜んだ。ウメは、貧弱乍ら夕食を幸子に馳走したいと思って、市場へ出かけた。

その間、幸子は政平にもいろいろ自分の心の迷いを話した。

政平は、例え満洲にいても芸術の仕事が出来ぬという事はない、満洲だから勉強出来ぬというような考えでは東京にいた所でよい仕事は出来ないとと思う、と幸子に云った。それは、ウメが大体同じような理窟——東京にいなければ文学の仕事が出来ぬという——を口実に東京にとどまろうと主張している事に対する彼の反駁でもあった。そのくせ、政平自身、つい一年前、満洲での職をやめたいと松本博士に云い送った時、松本博士から、満洲にいるから研究が出来ない、勉強出来ない、という事はないと云い説かれ乍ら、それには承服しなかったのである。

食事後暫くして幸子はいとまをつげた。ウメは幸子を送って外へ出た。幸子の乗る停車場はじきだったが、ウメはその近くの濠端公園へ誘った。ウメは其の公園が好きだった。昔からの松の古木その他木の植込みが沢山あって、下に見下すお濠には貸ボートの灯がチラチラ動いている。二人の話は、相変らず、幸子が東京にいたものか満洲へ帰

つたものかについてであった。

幸子の夫は幸子に、もう一年東京にいて勉強して、世間にも評判のよい作品が出来てから帰ってもよい、と云う。「それでもう、あとは大丈夫、という風に考えているのよ」と幸子は笑ってウメに云った。

「そうよ、世間一般の人は大概そういう風に考えるのよ。だけど、妻にそういう風にだけでも云ってくれる男の人って少いんじゃないでしょうか？ そんなにまであなたのことを考えてくれる旦那さんで、ありがたじゃないの」

「そうね。私もそう思うのよ。それで、迷うのよ」

幸子は、夫が一生満洲にいるといっている点でも家庭と自分の天分的な仕事との両立しがたさになやんでいるのだった。

「いつまでも御主人を一人満洲において、あなたがこちらにいらっしゃるといふのもねえ……」

「そうなのよ。私の母も、それを心配しているの。今朝、主人から手紙が来ましてね、私が東京にいたいなら居てもいいと云って来ましたのよ。それを見て却って母が氣をもむんですの。母に心配されてみると私も氣になるのでねえ……」

ウメは、一応は幸子に夫の許へ行った方がいいと云い乍ら、幸子の劇への熱情を思うと、矢鱈に満洲へ帰れとはいえなかった。そんな事を云うのは、幸子の天分への自分の嫉妬であり意地悪であるような氣もするのだった。

二人は、大きな曲りくねった松の古木が幾本も生えつらなっている暗い道を遠くまで行ってから引返した。

「あなたなんか羨しいわ。木原さんがよくあなたを理解していच्छるから。そして東京にいच्छされて……」

「いいえ、木原は矢張り京都へ帰りたいのよ。木原はずっと京都で育った人間だし、あちらには母やきょうだい達や親友がいるし、就職の口もあり易いし……」

「でも、東京にいच्छることにきまつたんでしょ？」

「ええ、今の所はね」

「羨しいわ」

「でも、あなた達だって、いつどんな事でまたじき内地へお交りになるかも分らないわ」

「そうねえ、そういう事もあればねえ。でも、あなたは偉いわねえ、そういう風に東京にいच्छして勉強なさる決心をなさって……」

「どうして？ 私が東京にいたいと思うのは大体は文学の為というんじゃないのよ。残念乍ら私は、今、それ程の熱情を文学に対して持っていないのよ。持っていたら却ていいと思うんですけど……私が東京にいたいと思う第一の理由は、木原の母達と一緒に暮すのがいやだからなのよ。私、東京でなら、木原の母達と一緒に暮してもいいと思うんですけど、京都の家ではいやなのよ。とても息苦しい感じがするんですもの。私、京都の家へ行くと、笑う事さえ、ろくろく出来ない、とてもいじけた気持ちになるし、木

原も、其のいじけた私を見るのがいやだということなんですもの」

幸子は、ウメが京都へ行きたがらないのは文学に対する熱情からのようにとっているが、ウメに云わせれば、それは世間にざらにある、古来ありふれた姑と嫁の不和からにすぎなかった。ウメは、自分と文学の仕事との関係を考える時、真珠貝と真珠の事を考えるのが常だった。そもそもウメが文学に親しみ出したのは、幼時家庭的に不幸だった、その慰めの為だった。今も若し家庭生活が順調に行くものなら、ウメは文壇に対しても別に野心をもつ必要はないのであった。ウメは不幸の時いつも文学に立ち戻るのである。真珠は客観的に見ては美しいが、それを生む真珠貝にとっては、真珠を生む事は幸福といえるかどうか？

だが、何はともあれ、現在、政平が東京にとどまってみると云ってくれている事はウメにとって喜びであった。こうして幸子と話していると、其の喜びが一層痛切に感じられて、自分は兎も角も幸福だと考え、政平へ素直な感謝を感じた。

二人が歩いて行く向うから、ステッキを持った和服の男が来る。あかりにすかして見ると政平だった。

「ああ、木原だわ」

そう云うウメの唇には、なごやかな微笑が浮んだ。ウメには、ステッキを振り振り歩いて来る、機嫌のよさそうな政平が嬉しかった。すれ違う時、

「散歩してたのよ」と、帰宅の遅くなったわけを言外にふ